

宮廷歌人 鈴木小舟女史

出自

小舟は安政4年（1857）11月、菰野藩士鈴木大三郎弘覚の長女に生まれる。弘覚35歳の時であった。

父

大三郎は文政5年（1822）菰野城下、東町の商家伊藤源蔵の第5子に生まれ、鈴木家に入り、その家を嗣ぐ。

母・弟

母は菰野藩士村木十郎兵衛綜明の娘「こう」。小舟には斎治郎という弟があったが、病弱で明治14年11月17日に夭折する。

室山に寄寓

父大三郎は、京都、大阪に出て儒学及び蘭学を学び、石見から肥前長崎まで医学を修め、また幕末には勤皇の志士あたりと深く交わり、廻国放浪して家に定住せず、止むなく室山の伊藤小左衛門宅に母子3人が寄寓する。

横浜

明治2年（1869）小舟13歳になる。明治維新となり父大三郎の勤皇攘夷運動も終わりを告げ、翻然と横浜に出て伊勢屋という両替商を開いた。ここに4人親子の平和な家庭に戻った。大三郎（47歳）は、横浜の三井両替店の懇請により同店に勤め、外国商人と接渉する通訳のことに従う。

小舟の学業

小舟の幼少時代の読み書きは、実母か、東町の寺子屋（瑞竜寺）で学ぶ。その後、父の影響もあって、横浜独英女学校に入学して外国語を学び、時代の先端をゆく学問を修めた。

結婚

明治6年（1873）小舟17歳になる。元長州藩士出、当時神奈川県警察の警部、安野美範と結婚する。

夫の死没

明治11年（1878）夫美範は秋田県へ転任の命が出て、小舟も夫と共に任地へ向う。翌12年、秋田地方はコレラの病気が蔓延、猖獗を極めその防疫に身を挺して尽くし不幸にして感染し、秋田に於いて病死する。

横浜に帰る

夫の死没により横浜に帰り、横浜プライアン女学校に勤め、更に英語を勉強の傍ら同校の家事教授となる。

父を訪ねる

大三郎は明治5年、三井を辞して下野の庚申山に籠り、御嶽教の行者となり那須地方を行脚、同10年埼玉県麦倉村に逗留し、焚須園という道場を開き農村青年を指導する。

同15年小舟は麦倉村の父を訪ね、暫く生活を共にする。父は明治26年12月23日病没



す。同 26 年、麦倉村の八坂神社境内に「弘覚翁碑」顕賞碑建つ。

湯の山へ

小舟は胸を患い郷里菰野へ帰り、湯の山で療養する。ときに寿亭女将、瀬古きくの庇護を受けた。来遊の名古屋の歌人林陸夫の指導を受ける。病気も次第に快復した。湯の山へ来遊の文人と交流し、歌道大いに進む。この頃の歌作に、

世の中の 春には遊び あきにけり いさ鷺と 山こもりせむ

高崎正風に会う

明治 33 年頃横浜在住の室山の人伊藤富治郎の夫人死亡。その遺児を扶育のとき、その継配、高崎正風家に勤めし縁により、葉山の高崎正風別邸を訪ねて、先年皇后に詠進の「世の中の春」の一首を示して、その作者が小舟と知り高崎はこのことを皇后に奏上、御感を得て御歌所出仕の命を拝した。

御歌所出仕

明治 33 年 (1900) 5 月 25 日「御歌道御用皇后宮職御雇」の御命を受けた。

皇太后崩御

大正 3 年 (1914) 4 月 11 日昭憲皇太后崩御 (65 歳)。社会事業、女子教育の振興、雅楽の復興に関心を持たれ、和歌をよくして、その数 3 万 6000 首に及ぶ。天皇の崩御の後青山御所にお移りになる。

歌道指導

皇太后崩御により宮内庁出仕を解かれ、東京に於いて山階宮をはじめ宮家の王女、華族の子女に歌道の教育を行っていた。

死没

大正 12 年 (1923) 5 月 6 日に母こうが死没した。晩年病気がちであった小舟は、同年 12 月 25 日、母の後を追うようにして東京の寓所で死没、66 歳であった。

歌碑

小舟の宮中出仕の端緒となった「世の中の春」の歌を石に刻み、ゆかりの湯の山涙橋を渡った所に昭和 5 年 4 月、伊藤某、伊藤小三郎、村木敏、内藤市蔵、太田喜市らによって建立される。

歌集

昭和 5 年 4 月 24 日に伊藤平治郎が、「鈴木小舟刀自歌集」124 頁を刊行した。内容は明治 33 年～大正 5 年頃までの歌を収録したものである。